

体

質

近頃、盛んに体质ということが言われます。個人の体质ばかりでなく、企業体质とか、役人人体質とか、日本人の体质とか、様々であります。体质とは、からだの性質、又組織団体などに深く染みこんでいる性質（広辞苑）とあります。問題が起りますと、まずこの体质ということ究明、そして一度と起こつてはならないことなのは言うまでもありません。もちろん会社の体质にその一因があつたのは確かです。しかしその会社の体质とはいつたい何なのでしょうか。そのような体质になつたのはなぜなのでしょうか。マニュアル化された現代は不均等より均等が求められ、効率と、正確さ、そしてスピードが要求されます。都会化されればされるほど、その傾向は強くなつていきます。あの列車事故でも、報道は毎日のように流されていますが、その報道に誰もが引つ張られていくように思えてなりません。誰かに、何かに責任をとらせよう、その犯人探しに、やつきになつていています。案の定それがあの運転士の家族の家でもテレビカメラが押し寄せ、親や家族は避難を余儀なくされています。謙虚さも何もあつたものではありません。あの事故現場を撮つているテレビカメラマンや、レポーターは怪我人を運ぶ手伝いをしてしまった。昭和三十七年、東京都荒川区の国鉄（現JR）常磐線三河島駅一南千住駅間で貨物線を走つていた下り蒸気機関車が脱線し、そこに上野駅発取り手行きの下り電車が機関車に衝突して上り線路内に脱線しました。更に、南千住駅を発車した上野行き上り電車が、脱線した下り電車に衝突するという、列車多重衝突事故となり、死傷者約五百三十名という事故になりました。この事故の後、遺体を何体も集団で安置しておりました場所に肉親を捜し当てて遺体に取りすがつて泣き始めた時、列車多重衝突事故となり、死傷者約五百三十名が安否を訪ねて探しに来ます。そこにもテレビカメラが入つています。ある家族が自分の肉親越して、その家族の泣く姿を撮り始めたのです。こんなことが、きっと今まで日常的に行われているのでしょうか。最初に考えるべきなのは自分の体质のような気がしてならないのです。乗客の一人の方がこんな意見を言われていたのが印象に残っています。『こんな事故を起したのは、私たちの勝手さが「因なのかもしねれないな」と。あの過密ダイヤにしたのは誰だったのか、一分でも早く到着を願つたのは誰だったのか、正確な時間に列車が到着しないとすぐに怒り出したのは誰だったのか。あの責任の所在の中にこの『私』がすっぽりと抜け落ちてしまうようです。すべて私が望んだことだったのではないでしようか。このような事故の背景の根本原因是この『私』の体质にあると思うのです。新幹線が三十分速くなつたからと大騒ぎをし、電車が遅れると文句を言い、安く、速く、正確に効率ばかりを望み、それを結果的には会社に押しつけてきたツケがまわつたような事故のよう気がしてならないのです。見直すべきはこの『私』の体质を仮法に訊ね、私の本当を知ることがこのような事故の教訓の出発点でありましょう。この世の中のあらゆる事は、縁起の法則でつながつてしているのですから・・私を見つめて。